

平成30年度 駿台懇話会

第25回連合駿台会学術賞・連合駿台会学術奨励賞受賞者は、下記の通り決定いたしました。

1.連合駿台会学術賞

【社会科学】

鍾 家新しょう かしん (政治経済学部教授)

『社会凝集力の日中比較社会学』

—祖国・伝統・言語・権威

2.連合駿台会学術奨励賞

【自然科学】

石丸喜朗いしまるよろう (農学部准教授)

「刷子細胞による腸脳軸を介したエネルギー代謝調節機構」

「Catecholamines Facilitate Fuel

Expenditure and Protect Against

Obesity via a Novel Network of the

Gut-Brain Axis in Transcription

Factor Skn-1-deficient Mice」

〈駿台懇話会 式次第〉

日時：平成31年1月16日(水)

午後5時30分

場所：明治大学アカデミーコモン2階

ビクトリーフロア隣の鐘

第1部 学術賞受賞記念講演会

1 挨拶 連合駿台会会長 田村 駿

2 講演 政治経済学部教授 鍾 家新

第2部 学術賞・学術奨励賞授賞式

1 挨拶ならびに表彰状授与

明治大学長 土屋恵一郎

2 記念品授与 連合駿台会会長 田村 駿

3 受賞者挨拶

政治経済学部教授 鍾 家新

農学部准教授 石丸 喜朗

第3部 懇親会

1 大学メンバー紹介

2 挨拶 学校法人明治大学理事長 柳谷 孝

3 乾杯 明治大学長 土屋恵一郎

4 閉会の辞 連合駿台会副会長 西澤 豊

(敬称略)



連合駿台会報

No.344 平成31年3月15日発行
発行・編集 連合駿台会
発行人 広報委員長・齋藤柳光
編集人 事務局・矢嶋まゆ子
〒101-0052 千代田区神田小川町三十三
明治大学「紫紺館」内
電話(〇三)三二九六―四七四七
印刷 有限会社 美 創



(左から) 柳谷孝理事長、石丸喜朗先生、鍾家新先生、田村駿会長、土屋恵一郎学長

連合駿台会学術賞・学術奨励賞を授与

新春の駿台懇話会（一月例会）

平成最後の年の最初の連合駿台会例会（駿台懇話会）を、一月十六日（水）十七時半より、明治大学アカデミーコモン二階「ビクトリーフロア眺の鐘」で開催しました。

田村会長の挨拶に続いて、学術賞および学術奨励賞受賞者が発表されました。そして学術賞受賞者の鍾家新先生（政治経済学部専任教授）の受賞記念講演がありました。

講演の要旨は以下の通りです。

*

近代以降の日本と中国に

おける社会凝集力

―日中比較研究の可能性を探る―

一、はじめに

連合駿台会学術賞が授与されることは、私にとって非常に光栄なことです。社会学の研究者としての幸運を感じます。心から感謝を申し上げます。これから約三十分、「近代以降の日本と中国における社会凝集力 ―日中比較研究の可能性を探る―」というテーマで、拙著を構想・執筆した過程や、考察の中で明らかにした主な内容と今後の課題について話してみたいとおもいます。

二、日中比較研究の魅力と困難

一九八七年、私は留学のため中国の広東省から来日しました。当時、すでに先進国になっていた日本と発展途中の国である中国との格差に驚き、その原因を探究したいとおもいました。日中比較という研究領域について魅力を感じました。しかし、同時に日中社会の比較研究の難しさも痛感しました。日中社会の比較研究を行うためには、日本と中国に關する同じ程度の知識量が必要ですが、その当時、筆者は日本社会を知りませんし、中国社会も十分に知りません。日中社会の比較研究のためには土台づくりが必要とかがえませんでした。そこでまず、日本の社会保障制度を切口として、日本社会について研究しました。その成果を『日本型福祉国家の形成と「十五年戦争」（ミネルヴァ書房、一九九八年）』としてまとめました。また、中国社会を分析し、その成果を『中国民衆の欲望のゆくえ』（新曜社、一九九九年）として著しました。十二年にわたるこれらの研究は日中社会の比較研究のための土台づくりでした。

二〇〇〇年以降、私は腰を据えて日中社会の比較研究に取り組んできました。二〇〇一年、幸運にも明治大学政治経済学部の一教員になりました。その後、恵まれた明治大学の研究環境のなかで、日中社会の比較研究に關する構想・聴き取り調査・執筆などをおこな

いました。しかし、日中社会の比較研究は想像以上に困難なものでした。拙著を完成させるために十六年もかかりました。

ふりかえれば、今年、私が来日してからすでに三十一年がたち、日本は私の第二の故郷となりました。中国での記憶より日本での記憶のほうが長いです。異邦人として日本で生活してきた三十一年間は、一方では日本社会に学習・適応する過程であり、他方では中国社会を再考する期間でもありました。つまり、日々の生活において、中国という鏡で日本社会を観察したり、日本という鏡で中国社会を眺めたりしてきました。このどっちつかずの立ち位置は私に時々孤独感を味わわせましたが、日中双方の社会を比較しようとする社会学の研究者にとっては極めて得がたい位置です。なぜなら日本社会にも中国社会にも一定の距離を保ちながら研究することができるところからです。

三、社会凝集力とは何か

近代以降の日本と中国は何によって成り立っているのか。近代以降の日本と中国をそれぞれ近代社会として成立させている諸力は何か。つまり、近代以降の日本と中国における社会凝集力とは何か。ここでいう社会凝集力とは社会を近代社会として維持・存続させる軍隊・警察などの暴力装置以外の諸力を指し

ます。拙著では近代社会における凝集力の諸要素のなかでの「祖国感情」「伝統文化」「言語感情」「最高権威」に注目し、これらを切口として日中の近代化の表と裏を分析してみました。日中両国を中心とする研究者たちのこれまでの探究によって、近代以降の日中社会に関する多くの優れた研究成果の達成が蓄積されました。しかし、管見の限りでは社会凝集力の重要な要素である「祖国感情」「伝統文化」「言語感情」「最高権威」という四つの視点からの日中社会の比較に関する研究書がまだありません。拙著はその最初の試みとなります。

「最高権威」は上位の支配者と下位の民衆の相互作用によって社会凝集力の機能を果たしているという特徴をもっています。これに対して、「祖国感情」「伝統文化」「言語感情」は国民同士や人民同士の水平的なつながりによって社会凝集力の機能を果たしています。近代になると個人だけではなく国家同士も競争単位となりました。苛烈な国家間の競争時代においては社会凝集力の高い国家が社会集団として凝集され、競争状態の中で有利な位置にあり、より有効に近代化を進めることができます。そして、個人は近代化された国家から利益をえることができます。しかし、社会凝集力の高い社会で生活している個人は社会からの縛りや抑圧が強くなり、個人の自由

がより多く制限されます。

四、日中比較研究の新しい試み

1 時期をずらした日中比較研究

日中社会の比較研究をおこなった過程において、まず時期をずらして比較することが高い有効性を持つことに気がつきました。

日本の本格的な近代化は一八六八年の明治維新から始まり、他方、中国の本格的な近代化は一九四九年の社会主義体制下から始まりました。日本の近代化は資本主義体制のもとで進められ、中国の本格的な近代化は社会主義体制のもとで土台が築かれ、資本主義的な手法を取り入れながら進められてきました。日中両国の民族構成や人口規模の大きさと近代化の過程が異なるため、同時期の社会変動に関する比較研究は極めて困難です。しかし、時期をずらしてあるいは近代化の全過程を俯瞰してみれば、非西洋国家の近代化としての日中近代化における共通の技法が多くみられます。拙著は、近代の日本と中国における最高権威の再構築と母国語をめぐる愛憎を探究しました。

〈1〉最高権威

日中両国の近代化においても、国民を凝集させるために社会統合の最高権威を必要としました。天皇制は近代日本の国家権力の総称であり、中国の共産党体制は一九四九年以降

の中国大陆における国家権力の総称です。近代化過程において両国とも最高権威を造り上げました。明治維新以降、最高権威としての日本の天皇制・天皇を構築しました。これにたいして、最高権威としての中国の共産党体制・毛沢東も構築されました。最高権威になる源泉は異なりますが、それを造り上げる手法の多くが酷似しました。

①両者の共通点。日本の天皇制・天皇と中国の共産党体制・毛沢東にはつぎの共通点がみられます。それらは日中両国のそれぞれの最高権威であり、それぞれの最高権威体制に寄生するエリートたちによって支えられ維持されてきました。教育・マスメディア・各種の儀式などによって、最高権威に対するそれぞれの民衆の崇拜の観念が植えつけられました。また、乱世革命の産物と支持基盤としての近代化の成功という共通点もみられます。

②両者の相違点。日本の天皇制・天皇と中国の共産党体制・毛沢東との違いも顕著なものです。主な違いとしてつぎの三点があります。これらは、過去か未来か、世界か国内か、最高権威の創設過程における最高権威者の参与度・主体性の違い、です。

〈2〉言語感情

近代社会になると国民国家の形成という視点からある言語を公用語として使用する必要性が強く認識されました。一個あるいは複数

の言語を公用語として使用するかどうかはそれぞれの国の事情によって左右されます。近代化の本質の一つは国民国家化です。国民国家化の過程において国家によって異なる言語政策がみられます。特定の言語が「国語」として位置づけられると、その言語は政治化され、ナショナリズムと関連させられ、宗教的な性格ももたせられます。つまり、母国語は国家のアイデンティティの象徴となり、事実とは関係なく国民に母国語が世のなかで一番美しく優れている言語だと思ひこませます。

日本と中国の近代化過程においてはそれぞれの母国語をめぐる愛憎の表出には異なる傾向がみられましたが、類似した側面もありました。つまり、明治維新以降、日本の言語政策の主流は日本語の国語化と帝国主義化でした。しかし、その傍流としての漢字・日本語の廃止提案もありました。他方、中国では清朝末期から一九四九年の社会主義中国が成立するまで半植民地化された状況のなかで中国語の国語化が順調に進められておらず、漢字・中国語の廃止に関する提案・運動は同時期の日本より強かったのです。

近代日本における漢字・日本語の廃止提案や近代中国における漢字・中国語の廃止提案が何度かそれぞれの国のエリートたちによって提出されました。国民が崇拜していたエリートたちがそれぞれの「国語」を欠陥言語

として判定し、英語などの外国語に変えようと提唱しました。それは当時の日本社会と中国社会の状況に鑑み、日中のエリートたちが西洋文明の前に自信を喪失してしまったからです。近代日本では漢字や日本語の廃止提案があったものの、結果的には日本語のなかでの常用漢字の制限にとどまりました。

また、一九四九年の前に中国で漢字・中国語の廃止運動がおりましたが、結果的には社会主義中国の時期に常用漢字の簡略化がおこなわれました。現在の日本における日本語も現在の中国における中国語もそれぞれの社会凝集力としての役割をはたしています。

2 越境集団をとおした日中比較研究

つぎに、「在日華僑華人」と「中国残留孤児」という越境集団をとおした日中社会の比較研究の有効性にも気がつきました。

〈1〉「在日華僑華人」の「祖国感情」

在日華僑華人は近代中国と近代日本の社会変動を凝縮した移民集団です。在日華僑華人の形成の歴史的な背景は東南アジアの華僑華人と異なります。在日華僑華人の生きる技法としてはエスニックの特徴の「利用」と「減少・隠滅」があります。戦後の華僑団体は社会主義中国と資本主義中華民国の対立に影響されました。在日華僑の「就職」「結婚」「氏名の改変」「帰化」などの生活世界は多種多様なものでした。また、在日華僑華人の異国

日本において、老いと死を受容しなければなりません。彼たちは「故郷」を喪失し、「故郷」を探しつづけてきました。「異郷人」「境界人」として彼らは日本と祖国中国から拒絶される経験もありました。

〈2〉中国残留孤児の「祖国感情」

他方、中国残留孤児という「移民」「移住」の集団から近代日本と近代中国を分析することができません。日中戦争と日中格差は中国残留孤児問題が発生した歴史的な背景です。第二次世界大戦直後の中国残留孤児は日本に移住するまで、中国において生活しました。日本という国民国家を構築するためには「日本人」という国民の創出が必要です。一九八〇年以降の日本政府による中国残留孤児に関する帰国・定着に関する行政は「日本人」として認定するかどうかという視点で、中国残留孤児を選別・再認定する過程でもありました。そのなかで、日本帰国をめぐる中国残留孤児が書いた大量な手紙という第一次的な資料は、祖国に対する彼らの想像と早く帰国したい心情を表していました。

二〇〇〇年頃、老いた中国残留孤児は貧困状況に陥りました。彼らは老後保障を獲得するために、日本政府を訴訟の対象にしました。中国残留孤児の老後を支援する日本政府の新しい支援策に彼らは妥協しました。この老後保障を求める過程で、中国残留孤児は中

国での生活を不幸だとも思うようになり、中国人養父母に対して、感謝から拒絶へと変わった人が見られます。彼らは中国と日本という二つの国家のはざままで生きてきた境界人であり、日中間の経済発展の格差を利用して個人の幸福を求めてきた移住者でもありません。

「中国残留孤児」は日中の近代化の格差を生きた越境集団であり、日中には「祖国感情」が誘発されました。彼らは日中戦争の犠牲者であり、祖国に利用され・遺棄された存在です。同時に自分たちは祖国を利用したという思いもあり、複雑な相互関係がみられました。

3 社会の大転換期をととした日中比較研究

さらに、社会の大転換期をととした日中社会の比較研究の有効性にも気がつきました。

〈1〉後藤新平の台湾統治と〈伝統文化〉

台湾の植民地統治という激動の社会変動の時代に、日中の「伝統文化」はどう認識されたかはこれまで研究されませんでした。後藤新平は台湾統治において新しい植民地の統治法を探求しました。この過程において、日中の「伝統文化」は再認識・創造され、植民地統治の道具として利用されました。

後藤は、中国の〈伝統文化〉と〈国民性〉を生かした台湾統治策を究明しました。代表的なものはつぎのとおりです。これらは、(1)

台湾の「阿房宮」と称された総督官邸の营造と台湾の「皇帝」のような総督巡視の演出、(2)地域監視制度であった「保甲制度」と「答杖刑」、(3)官営賭博であった「台湾彩票」、長寿者を祝う饗老典、漢詩を楽しむ揚文会、でした。

後藤からみれば、中国文明はインド文明と同様であり、その栄光は既に古い世界に属し、民族として勃興する力はもはや存在しません。後藤は、衰亡の国運にある中国民族に対して、日本民族は日本帝国を創建した優強民族であると主張しました。戦前日本の国家戦略に対する後藤新平の影響は深かったのです。

〈2〉中国の社会保障と〈伝統文化〉

一八四〇年のアヘン戦争以降、中国は衰退の一途を辿りました。二十世紀になると、エリートたちは儒教など伝統文化が中国の近代化を阻害したと主張しました。中国の二十世紀は伝統文化を反省し、伝統文化と闘争した世紀でした。一九四九〜一九七八年の中国はソ連を準拠国家とし、社会主義体制のもとで近代化を進めていきました。これまでの伝統文化は封建的なものとされ、時代遅れのものとして批判されました。儒教などの伝統文化も批判の対象となりました。しかし、長い年月の中で結晶した伝統文化は政治運動に完全に否定されることができませんでした。一九六

六〜一九七六年の「文化大革命」の期間でさえ農村では宗族などの伝統文化が依然として温存されていました。中国にとって、「社会主義」も「社会保障制度」も舶来文化です。二十世紀において、中国は〈伝統文化〉と相乗・相剋しながら「社会主義」を受け入れました。一九九〇年代以後、今度は「福祉国家体制」を受け入れつつあります。「福祉国家体制」の整備は中国の一部の〈伝統文化〉を衰退させ、一部分の〈伝統文化〉を強化させています。

五、おわりに

十九世紀と二十世紀は人類の歴史において激動的な時期であり、日本社会と中国社会にとっても同様でした。その二世紀の間に日本は西洋ではない国のなかで、いち早く近代化の成功を達成し、東洋の一小国から世界大国に登りつめました。これに対して、アヘン戦争以降の中国は封建帝国の衰退を経験し、紆余曲折する近代化の道を進みました。両国はそれぞれの近代化の道を進んできました。今日では双方ともに大国として国際的に評価されています。両国の近代化の歴史は人類社会における近代の社会変動の一環であり、両国の近代化への探究は近代化、特に非西洋社会の近代化を分析することにつながります。つまり、近代以降、西洋の国家ではな

い日本と中国の社会変動は世界的に注目され、社会科学の共通の研究課題の一つとなりました。

拙著では社会凝集力の要素として前述の四つを取り上げましたが、この四つにつきるものではありません。五番目以後の各種の要素がかんがえられます。また、「言語感情」は「伝統文化」と重なっている側面があるように、四つの要素の間には内在的に相互関連があります。五番目以後の各種の要素および各要素の相互関連に関する探究を今後の研究課題としておもっています。

この受賞を励みにして、東洋社会の構造の特質を究明するために、今後さらに日中社会の比較研究をおこない、東洋文明に基づく新しい社会学の概念と理論の構築をめざし邁進したいとおもっております。

ご清聴ありがとうございます。

◆新入会員ご紹介

前会までの理事会で承認され、入会された方をご紹介します。(敬称略・到着順)



あいき たかひと
相木 孝仁
平成六年・政経学部卒
(株)鎌倉新書
代表取締役社長
東京都世田谷区在住



くさま けんいちろう
草間 謙一郎
平成四年・工学部卒
(有)かいたく・代表取締役
長野県松本市在住



まつい ようじろう
松井 洋二郎
平成十五年・経営学部卒
(株)マツイ
専務取締役・営業本部海外事業統括
東京都港区在住



おおはし しげお
大橋 重男
昭和五十五年・商学部卒
ダイガン(株)
執行役員・営業本部副本部長
埼玉県川口市在住



ねのもと ちさこ
榎本 知佐
昭和五十九年・法学部卒
(株)日立製作所 エクゼクティブ・
コミュニケーション・ストラテジスト
東京都中央区在住



たなか よしゆき
田中 義之
昭和六十三年・工学部卒
(株)松田平田設計
執行役員・総合設計室副室長
東京都台東区在住

◆明大ニユース

●二〇一九年度一般入試
志願者数三年連続十一万人超え
―全学部統一入試で初めて
英語4技能方式を導入

明治大学の二〇一九年度入学試験は、三月四日に出願締切となった大学入試センター試験利用入試(後期日程)など一部を除き試験日程を終えた。特別・推薦入試を除く一般入試の志願者数は二月末の時点で十一万三千三百四人。定員管理の厳格化などで志願者数は五年ぶりに減少したものの、三年連続で十一万人を超える結果となった。

二〇一九年度入学試験では、全学部統一入学試験において初めて農学部、経営学部、国際日本学部、総合数理学部で英語4技能試験(資格・検定試験)を活用した受験が可能となったほか、一般選抜入学試験の商学部、経営学部、国際日本学部においても昨年引き続き、英語4技能試験を用いた入試方式が実施された。入試種別ごとの志願者数では、各学部が実施する「一般選抜入試」が五万八千二百五十七人(前年度比九一・九%)。多くの学部が志願者を減らす中、商学部、総合数理学部は志願者数が増加。ビジネス分野やAI、ICT、IoT関連を学ぶことができる学部への人気を反映する形となった。

本学キャンパスと全国六都市（札幌・仙台・名古屋・大阪・広島・北九州）が会場となる「全学部統一入試」は二月五日に実施。志願者数は二万七千七百七十六人（前年度比一〇〇・七％）で、農学部、経営学部、情報コミュニケーション学部、国際日本学部、総合数理学部が志願者を伸ばし、全体では昨年から微増となった。

「大学入試センター試験利用入試」前期日程の志願者数は三万二千二百七十一人（前年度比九〇・〇％）。後期日程は、商学部、理工学部（機械工学科を除く）、総合数理学部で三月四日まで出願を受け付け、本学の最終志願者数は三月上旬～中旬に確定する。

●全国大学ラグビーフットボール選手権 二十二年ぶり十三回目の大学日本一

明治大学体育会ラグビー部は一月十二日、第五十五回全国大学ラグビーフットボール選手権大会の決勝で、天理大学を22-17で下し優勝。一九九七年以来、二十二年ぶり十三回目となる大学日本一の座に輝いた。

決勝戦は二万人を超える観客の大歓声に包まれた秩父宮ラグビー場で、十四時十五分にキックオフ。開始直後に先制のトライを許したものの、前半七分に山崎洋之選手（法3）がゴール右隅にトライを返し、同点に。前半二十二分には、この日終始優位に立ったライ

ンアウトから、高橋汰地選手（政経4）が走り込んでトライし、12-5とリードして前半を終えた。

後半開始後も試合を有利に進め、後半十六分には山沢京平選手（政経2）がペナルティゴールを決めて追加点。後半二十一分には、相手ゴール前でのフォワード陣の攻防から、武井日向選手（商3）が抜け出してゴール中央にトライし、22-5とリードを広げた。試合終盤には天理大の猛攻に2トライを返されたものの、最後まで堅い守備を崩さずに後半四十分過ぎ、スタンドに響き渡る「明治」コールの大歓声の中、22-17でノーサイド。5点差の接戦を制し優勝を果たした。

今シーズンのラグビー部は、昨年四月に就任した田中澄憲監督のもと、福田健太中将（法4）を中心に躍動し、関東大学ラグビー春季大会では、五戦全勝で優勝。九月から十二月に行われた関東大学対抗戦では五勝二敗の三位（大学選手権は関東四位扱いで出場）に終わったものの、大学選手権では準々決勝の東海大戦（18-15）、準決勝の早稲田大戦（31-27）ともに接戦を勝ちきる底力を見せた。

●長堀守弘氏

フランス芸術文化勲章シュヴァリエ受章

学校法人明治大学の長堀守弘顧問がこのた

び、フランス共和国政府の芸術文化勲章シュヴァリエ（騎士）を受章した。

芸術文化勲章は、フランス文化省が運用する名誉勲章で、芸術・文学の領域での創造もしくはこれらのフランスや世界での普及に傑出した功績のあった人物に授与されるもの。長堀顧問の受章は、宝石・貴金属輸出入、製造加工、販売などを行う（株）ナガホリの創業者としての功績や「森杏太郎」名で行う詩人としての文学活動、さらには学校法人明治大学理事長時代（二〇〇八～二〇一二年度）のシモーム・ヴェイユ基金設立やクリスチャン・ポラックコレクション展など日仏関係におけるさまざまな取り組みで中心的役割を担ったことなどが評価された。

一月十八日、フランス大使公邸（東京都港区）で執り行われた叙勲式には、柳谷孝理事長、土屋恵一郎学長はじめ大学関係者も多数列席する中、在日フランス大使館のジャン＝パティスト・ルセック公使から祝辞とともに勲章が授けられた。

今回の受章について長堀顧問は「本来ならば中央図書館関係者が受章にふさわしいが、当時の小生の役職により代表者として受章したものだと思う」と喜びを語った。

●羽田空港国際線ターミナル駅に

「錯視サイン」が登場

研究・知財戦略機構の杉原厚吉特任教授(MIMS所長)が助言した「錯視サイン」が一月二十八日、京急電鉄の羽田空港国際線ターミナル駅に設置された。

この取り組みは、旅客に同駅構内のエレベーター利用を促すために京浜急行電鉄(株)が導入したもので、錯覚を用いた案内サインが駅構内で本格的に活用されるのは、鉄道事業者として日本初。この錯視サインは、同駅二階・改札内コンコース(エレベーター付近)床面に設置され、実物の看板とは異なり床に貼り付けた絵が立体的に見える。国籍や年齢を問わず効果が期待されており、増加する訪日外国人利用者を中心にエレベーターの利用を促すことで、効率的な旅客誘導やエスカレーターからの手荷物落下による事故の防止などを図ることが狙い。

これに合わせて、杉原特任教授がこれまでに生み出した錯視作品展「杉原厚吉のふしぎ?錯視展」が同日より、同じく羽田空港国際線ターミナル駅にて約三カ月間の期間限定で開催されている。

今回の展示について杉原特任教授は「外国からたくさんのお客様が来る玄関口。日本でこのように数学を使った研究がなされているのだと知ってもらおう機会になってもらえれば」と期待を示した。

●日経 未来面シンポ「つくりかえよう。」

土屋学長が企業トップと議論

日本経済新聞社主催(後援:明治大学)の日経未来面シンポジウム「つくりかえよう。」(企業トップと話ができる。就職活動に役立つ)が二月二十七日、駿河台キャンパス・アカデミーホールで開催され、明治大学から土屋恵一郎学長がパネリストの一人として登壇した。

このシンポジウムは、企業のトップが日本経済新聞の紙面を通じ、未来を切り開くための斬新なアイデアを読者から集めるという「未来面」プロジェクトの一環で、リアルな場で企業や大学トップと読者が直接ディスカッションを深める機会を提供することが目的。近年では就職活動を控えた学生を対象とした企画として大学と連携している。

当日はまず、(株)三菱ケミカルホールディングス代表執行役社長の越智仁氏、日東電工(株)取締役社長の高崎秀雄氏、大和ハウス工業(株)代表取締役社長の芳井敬一氏、三井住友海上火災保険(株)取締役社長の原典之氏が登壇し、各企業の取り組みについてショートスピーチを実施。その後、土屋学長、就職コンサルタントの村山涼一氏を加えた六氏によるパネルディスカッションが行われた。

テーマに挙げた「海外の企業にない日本企業の強み」「デジタル社会に必要な能力」

「グローバル人材とは」に対し土屋学長は「モラリティがあることが外資系企業にはない日本企業の特長」「既存のものを結合させて新しいものを生み出すことができる能力が求められている」「グローバルな舞台ではインテグリティ(高潔さ、誠実さ)が重視されている」など持論を展開。他にも海外戦略やダイバーシティの取り組みについて意見が交わされた。

質疑応答では、「将来的な社会保障と財政のバランスを企業はどう考えるか」「将来に向けて個性を磨くためにどうアプローチしたらよいか」「欧米と比較した日本の大学の存在意義」など会場の学生から鋭い質問が多数寄せられ、活発な議論が展開された。

●明大スポーツ新聞部

二つの学生新聞コンテストで最優秀賞

体育会明大スポーツ新聞部はこのほど開催された、「第八回大学新聞コンテスト(スポーツ新聞部門)」(東京五大学新聞連盟・関東学生新聞連盟など主催、朝日新聞社・日刊スポーツ新聞社特別後援)と、「ナジック杯第十二回大学スポーツ新聞コンテスト」(報知新聞社・ナジック学生情報センター共催)において、それぞれ最優秀賞を受賞した。

「大学新聞コンテスト(スポーツ新聞部門)」での最優秀賞(朝日新聞社賞)受賞は、二年

連続五度目。記事賞、コラム賞、凸・レイアウト賞で上位の評価を受け、東西十七大学の頂点に立った。

一方、「大学スポーツ新聞コンテスト」は、スポーツ新聞を定期発行している全国十七大学が、紙面の出来を競うもの。昨年十一月に発行の「ラグビー明早戦特別号」の企画や構成が評価され、初めての受賞となった。

明大スポーツ新聞部は一九五三年創部で、部員約七十人。体育会四十四部の競技成績や学内外の話題を幅広く紙面・WEBサイトで紹介している。

●連合駿台会

第二十五回連合駿台会学術賞・学術奨励賞

連合駿台会は一月十六日、「第二十五回連合駿台会学術賞・学術奨励賞」を発表し、政治経済学部の鍾家新教授が学術賞を、農学部の石丸喜朗准教授が学術奨励賞をそれぞれ受賞した。同賞は、政財界などで活躍する明治大学校友の親睦団体である連合駿台会が、本学教員らによる学術研究上の特に優れた成果を表彰するもの。

駿河台キャンパス・アカデミーコモンで行われた学術賞受賞記念講演会の冒頭、あいさつに立った連合駿台会・田村駿会長は今回受賞した二氏をたたえ「これを機にますます明大発展のためにご尽力いただきたい」と激励

した。

続いて、受賞者を代表して鍾教授が「近代以降の日本と中国における社会凝集力―日中比較研究の可能性を探る―」をテーマに講演。留学生として来日してから三十年来、日中社会の比較研究を行う鍾教授は、近代社会を成立させている諸力として「祖国感情」「伝統文化」「言語感情」「最高権威」に注目し、四つの要素やそれらの相互関連を紹介しながら、世界から注目される近代以降の日本と中国の社会動向について講演した。

続く授賞式では、土屋恵一郎学長から賞状、田村会長から記念品がそれぞれ受賞者に手渡された。これを受けて鍾教授は「明治大学に来てから十八年。今後ますますに研究を推進し、学生に還元していきたい」、石丸准教授は「より一層、研究に励み、今後も学生への指導を丁寧に行っていきたい」と、それぞれ関係者への感謝を述べるとともに、より一層研究にまい進していくことを誓った。

●OB社長

▽(株)共和電業 田中義一氏（一九八〇年法学部卒・六十一歳、三月二十八日就任予定）

▽(株)永谷園 五十嵐仁氏（一九七九年商学部卒・六十三歳、四月一日就任予定）

▽中部飼料(株) 平野晴信氏（一九九五年商学部卒・四十七歳、六月下旬就任予定）

●「表層型メタンハイドレート・フォーラム」

―研究成果の総括と今後の展望を発表

明治大学研究・知財戦略機構ガスハイドレート研究所（代表 松本良研究・知財戦略機構特任教授）は一月二十五日、「表層型メタンハイドレート・フォーラム」研究成果の総括と展望を駿河台キャンパス・グローバルフロントで開催した。

今回で五回目となる本フォーラムは、二〇〇四年から始まった学術調査、二〇一三年から三年間の経済産業省の受託研究、引き続き独自の海洋調査と民間との共同研究によって得られた多様かつ先進的な研究成果を総合的に総括し、今後の開発事業や学術研究を展望することが目的。グローバルホールでは明治大学をはじめ千葉大学、鳥取大学、東京家政学院大学の研究者や民間企業の技術者などによる十五の口頭発表が、また多目的室では三十一のポスター発表が行われ、メタンハイドレートの資源と環境に関する具体的・詳細な成果について、参加者約百四十人との間で活発な議論が交わされた。

今回は特に調査開始15年の集大成として、「氷状のガス」という極めて特異なエネルギー資源であり、また巨大な炭素貯蔵庫であるメタンハイドレートについて、実際の事例と調査経験を踏まえた内容が発表された。

ガスハイドレート研究所は、海洋底に広く分布するメタンハイドレートの資源ポテンシャルと環境インパクトを、海洋地質・地球物理探査と地質試料の分析を通して調査・研究することを目的として二〇一二年に研究・知財戦略機構の研究ユニットとして設立（二〇一五年から研究クラスター）。二〇一三年度より毎年、調査研究成果を報告するフォーラムを開催している。

●有楽町で「明治大学発祥の地記念碑祭」

明治大学の開学の起源に触れ、母校のますますの発展を祈念することを目的とした「明治大学発祥の地記念碑祭」が一月二十七日、本学発祥の地である東京・有楽町近くで開催された。

この会は校友会東京都南部支部が中心となり、毎年記念碑が設置されている有楽町近くで開催するもので、今年で十回目。当日は柳谷孝理事長、飯田和人経営企画担当常勤理事、向殿政男校友会長、石川雅己千代田区長、創立者の一人・岸本辰雄先生の曾孫の岸本幸雄氏をはじめ百三十五人の校友が出席した。

第一部では、百瀬恵夫名誉教授による「『明大魂と人間力』」の特別講演が行われた。百瀬名誉教授は、明大愛と人間力についてユーモアを交え

て語り、会場は大いに盛り上がった。

第二部では冒頭、柳谷理事長があいさつに立ち、記念碑に対する思いと開催について謝意が述べられた。続いて、岸本氏からはこのたび令息の洋和氏のもとに岸本家六代目が誕生された報告があるなど、脈々とつながる明治大学の絆を実感する機会となり、最後は全員で校歌を斉唱し、盛会のうちに終了した。

●和歌山県との連携講座

「岡潔シンポジウム」

明治大学の生涯学習機関・リバティアカデミーは二月二十三日、和歌山県との連携講座「岡潔シンポジウム 紀の国の偉人―世界が認めた孤高の天才数学者―」を駿河台キャンパス・アカデミーホールで開催した。

和歌山県に縁のある偉人の功績を顕彰することを目的としたこの連携講座は、今年で八回目。今回は、日本が生んだ世界的数学者で日本の情緒や日本文化の重要性を訴え、教育問題についても切り込んだ随筆家でもある岡潔氏（一九〇一―一九七八年）に焦点を当てて行われ、約千人が来場した。

岡氏郷里の和歌山県橋本市・平木哲朗市長のあいさつでスタートしたシンポジウムは、まず、数学者、作家でお茶の水女子大学名誉教授の藤原正彦氏が「岡潔先生の今日の意味」と題して基調講演。代表的著書『春宵十

話随筆集』をはじめ岡氏が残した言葉の数々を紹介しながら、論理の危うさと美的情緒の大切さなどを解説。さらに岡氏が説いた自国の文化や伝統を大切にすることの重要性に触れ「グローバルイズムの中にあっても、日本人の情緒は普遍的価値である。それを訴え続けたことが岡氏の今日の意味ではないか」と熱弁をふるった。

続いて行われたパネルディスカッションでは、奈良女子大学岡数学研究所長の松澤淳一氏をコーディネーターとして、和歌山在住の作家・佐藤律子氏、和歌山県企画部長の田嶋久嗣氏、明治大学から総合数理学部の砂田利一教授、思想家・人類学者で明治大学野生の科学研究所長の中沢新一特任教授が登壇。岡氏の魅力や同氏が残した言葉、その生き様から今の時代に我々は何を学ぶべきかについて議論を交わした。

●植村直己冒険賞に

探検家・岡村隆氏

世界的冒険家・植村直己氏（一九六四年農学部卒・山岳部OB）の精神を継承し、自然を相手に創造的な勇氣ある行動をした個人または団体を顕彰する「植村直己冒険賞」の受賞者発表記者会見が二月十二日、駿河台キャンパス・紫紺館で行われた。植村氏の故郷である兵庫県豊岡市が主催する同賞は今年で二

十三回目。今回は、五十年におよぶ南アジア密林調査の中で数々の仏教遺跡などを探査した探検家の岡村隆氏が受賞した。

受賞に際し、豊岡市の中貝宗治市長は「自然を対象に不撓不屈の精神によって未知の世界を切り拓く岡村氏の五十年におよぶ挑戦の姿勢に、喜んで植村直己冒険賞を贈呈したい」と称賛した。

岡村氏は、これまでスリランカで80カ所、モルディブで十一カ所の遺跡を確認してきた活動を振り返り「未知のものを発見した時の喜びが魅力。地味で目立たない遺跡もあるが、これからも一つひとつ丁寧に調査を続けていきたい」と意気込みを語った。

記者会見の様子は、植村氏の母校・豊岡市立府中小学校にも同時中継され、六年生の児童が代表してお祝いのメッセージを発表。これを受けて岡村氏は「一つひとつは小さなことだが、長くやってきたことに意味がある。皆さんもそういうものを見つけてほしい」とエールを送った。

なお、同賞の授賞式は六月一日に豊岡市・日高文化体育館での開催が予定されている。

◆駿台トピックス

●新入会員歓迎会で最多二十一人が交流

恒例の新入会員歓迎会が二月十四日午後六時半から、過去二年間に入会されたみなさま

の中から、これまで最多の二十一人の方々に参加していただき、東京・神田小川町の紫紺館で開かれました。鈴木隆志総務事業委員長の進行で、当山明彦専務理事が司会を務め、まず、田村駿会長が、「さらなる明治大学ネットワーク構築のためにも会の活動に尚一層のご理解を」と歓迎の挨拶を行い、運営委員会を構成する総務事業鈴木、組織・会員補強高澤徹、大学支援浅井宏、広報齋藤柳光、財務小山修の各委員長、そして矢嶋まゆ子事務担当がそれぞれの現況などを報告して、活動への協力もお願いしました。

そして、齋藤広報委員長の乾杯の音頭で懇親会に入り、宴もたけなわとなったところで二十一人の方々には自己紹介も兼ねて、母校の思い出や仕事の話まで、それぞれ持ち味もたっぷりな楽しいスピーチを披露していただきました。せっかく入会してくださっても、卒業してから母校を訪れるのは初めてという人もおられるなど、ご都合で例会などにもなかなか参加がままならない方も少なくなく、名刺交換しながら親しく交歓して、絶好の相互理解の場となったようです。

盛り上がったところで高澤組織・会員増強委員長の音頭で関東一本締めして、今年で創立一四〇周年を迎える会のためにも連携や母校への支援などで力を合わせていくことを約しました。



新入会員参加者は以下の方々です。

江崎徹、榎本知佐、小嶋修司、柴田清之、田中義之、田村健、樽見俊之、辻井知明、内木祐介、中村康一、根岸伸明、萩原裕次、平田静子、藤田利之、丸山雄平、美濃和男、宮入知喜、宮崎潔、宮嶋優光、山崎康幸、渡邊一治

(敬称略・五十音順)

◆駿台懇話会出席者

○明治大学ご招待者

柳谷孝、土屋恵一郎、中村義幸、鈴木利大、大田原健司、荒川利治、林義勝、平井克彦、清水秀夫、越川芳明、出見世信之、小西徳應、針谷敏夫、長谷川滋、飯塚浩司、鈴木一弘、市川園子、竹内亮、小瀬川響子、高瀬功、鍾家新、同令夫人、石丸喜朗、同ご友人、小川知之、豊川浩一、古谷英二、石川日出志、織田哲司

(敬称略)

○会員出席者

青木幹則、青柳勝榮、秋山隆敬、坪昭二、浅井宏、安達明正、飯田和人、石川かおり、石橋良一、市川治彦、伊原敏雄、岩田守弘、植木榮、上西紘治、宇川一夫、内川雄一郎、江崎徹、大原幸男、大前実之、尾暮敏範、鬼塚和也、金井健、狩野省市、栢森靖、荊部彰夫、河村博、小島清治、小山修、小山有彦、齋藤柳光、笹田学、佐藤健、佐藤寛、佐野公

哉、志村康洋、杉浦伸二、鈴木紘一、鈴木隆志、関根均、相臺志浩、高澤徹、武田宣夫、田口幸隆、同ご友人、田代恭一(代理)、田村駿、樽見俊之、辻井知明、当山明彦、徳丸平太郎、富水流孝二、中川敏洋、中里猛志、長堀守弘、中村豊、並木洋一、西澤豊、西山武夫、萩原裕次、長谷川進一、原田榮、日高憲三、平川清、平田静子、深代尚夫、福田和彦、藤代耕一、藤巻伴英、前川一郎、眞壁八郎、松崎優子、水澤元博、宮人知喜、宮坂寿彦、向井眞一、村岡健、室井恵明、山口大介、山田朝彦、山田勝、吉村正徳、渡邊一治

【編集後記】

季節は春になりました。だんだんと暖かくなり始めています。啓蟄も過ぎ、三寒四温の通りにまだまだ寒い日も続いています。そして、あと少しで平成の世も終わろうとしています。会員の皆様いかがお過ごしでしょうか。

平成の世は大きな災害が続きました。この季節になると思い出すことは、「東日本大震災」です。あつという間に八年が過ぎようとしています。被災された皆様方へお見舞いを申し上げたいと思います。

私はあの日、ビッグサイトでイベントに参加していたところ地震に遭いました。すぐに電車で高速が止まりましたから、車を使って数時間かけて会社に到着しました。当時、情報源はラジオしかありませんでした。また、携帯電話もほとんど通じなかつたのです。やっと携帯電話のメールが通じて、従業員の安全を確認して安心したことを覚えています。

帰って来てからTVで映像をみて、大変なことになったと改めて認識しました。それから、数日は臨戦態勢で過ごしました。それは、救助に向かっている船舶の電気系統の器具・照明・信号・ヘリコプター離発着のための支援器具などを私の会社を中心に納めているので、トラブルがあつたらすぐに駆け付け、対応しなければ

ならなかつたからです。

幸いなことに正常に稼働したので、ホッとしました。少しでも、お役に立てたのだたら良かったなあと思つています。まだまだ、復興には時間がかかります。まず、忘れないこと。そして、できる範囲で応援していかなくてはならないことだと思います。

関東大震災以来、「天災は忘れた頃にやってくる」と聞かされ育ってきましたが、備えは思つていた以上に必要で、あれもこれもと不備に気がつかれました。

東京では条例が出来て、事業所では三日分の衣食住を確保しなければならぬことになり、極寒仕様の寝袋、ペットボトルの水、お湯を使わない食糧、簡易便所、電池式のラジオ、照明、鉄板底の靴、ヘルメットなどを準備しました。

後で、経営者仲間の友人から、宿泊施設の確保、自転車、靴、飲食料の購入などが有効だと聞かされました。また、ご家族や会社との連絡が大事です。やはり、備えあれば憂いなし、なのだなあと思ひます。

これから、首都直下型地震などの予測もされています。どうか、いざという時の備えをお考えくださいませ。

(大石 哲也)